

国際学部の新しい強みへ、国際人道法大会での準優勝

—2022年度国際人道法模擬裁判・ロールプレイ大会に関する報告会—

藤井 広重・中村 真

模擬裁判大会：菊地翔（4年）、鈴木ひとみ（4年）、Magda Yukari HAGIYA CORREDO（3年）
ロールプレイ大会：横山友輝（M2）、榎原彩加（M1）、Magda Yukari HAGIYA CORREDO（3年）

概要

2022年12月10日～11日に赤十字国際委員会駐日代表部主催の国際人道法模擬裁判とロールプレイの両国内予選会が開催され、国際学部藤井広重研究室から出場した学生たちが両大会にて準優勝に選ばれた。これは、宇都宮大学初の快挙であり、これまで国際平和と人権人道法研究会が取り組んできた「国際人権・人道法プロジェクト」の成果でもある。12月16日に、参加した学生たちは中村真国際学部長を表敬訪問し、受賞の報告と熱戦の舞台裏について語った。以下がその内容である。



菊地：今回、藤井研究室で出場したのは、国際人道法ロールプレイ大会と国際人道法模擬裁判大会という二つの大会です。ICRCが主催されており、このICRCは日本語だと赤十字国際委員会という国際的な人道支援団体です。

中村：ホームページも拝見しましたが、よくわからなかったので、色々お話しただけだと思います。

菊地：はい。まず、模擬裁判大会からご説明させていただきますと、大会側から事前に紛争の概要が書かれたシチュエーションが提示され、具体的な訴追内容も掲載されています。今回は環境に対する攻撃二つに加えまして国連職員に対する攻撃と文民に対する攻撃の四つの訴追について議論しました。訴追はICCという国際的な刑事裁判所でなされるのですが、私たち学生が検察側と弁護側に分かれ、それぞれの立場から主張します。ロールプレイ大会では、例えば人道支援団体の職員になりきって、紛争被害者の方への聞き取りですとか、あとは紛争当事国政府とのディスカッション、また、公式な会議で文民を守るためにはどうすればいいのか、法的なアドバイスを提示したりします。両大会ともに、国際人道法という紛争のルールを決めた法律を使って、知識を競う大会です。どちらも今回1位を取ることができず、非常に悔しい思いではありますが、2位という順位をいただくことができました。

中村：入室時におめでとうと言ってしまいました。一般的な観点から2位を取られたというのは立派な成果だと思うのですが、皆さんのモチベーションとしてはやはり1位を目指してということなのですね。

菊地：もちろん2位でもすごく嬉しいですが、どちらの大会も1位になれば更に国際大会へ出場することができたので、そこを目指していました。ですので、悔しい思いは残りました。

中村：来年はメンバーも変わってしまうから、毎年一発本番みたいな感じになるのですか。

菊地：研究室で毎年出ている大会ではあったので、先輩方からの積み重ねのおかげで、今年やっとうような順位で結果を残すことができたと思います。準備は大変なので、出場するだけでも大変ですが、1人2回まで参加することができます。

中村：例えば一年生のときから4回出るみたいなわけにはいかないのですね。

藤井：横山さんは学部有的时候にロールプレイ大会に1回出られていて、今回が2回目になりました。菊地さんと鈴木さんは去年模擬裁判に出ているので、今回がラストイヤーでした。

中村：Hagiyaさんは1回目ですか？

Hagiya：そうですね。

中村：では、大学院まで考えるといつ2回目行くかというのは結構悩ましいですね。ちなみに、その大学院のメンバーと学部のメンバーは混ざっていいということですね。

藤井：宇都宮大学から1チームということになっておりますので、院生と学部生の混合チームは問題ないということになっております。

中村：研究室単位ということではない？

藤井：はい。以前は2年生が出場したこともありますし、他の大学では1年生や2年生の方もたくさんいらっしゃいます。

中村：土曜日にロールプレイ、日曜日に模擬裁判が行われたんですね。

鈴木：大会中は大学の名前って呼ばれることはないで、番号で呼ばれます。ですので、どの大学がどの大学と対戦しているか分からないようになっていきます。

中村：裁判官や審査員が分からないようにですね。でも現実的に考えて、その辺は本当に分からないんですか。

鈴木：4年目の出場なので、「あ、この大学かもしれないな」みたいなのはありますし、特に常連の出場校に関しては裁判官もおそらく分かっていると思います。ですが、公式ルールのには、その機関の名前は伏せて裁判をいただいています。

中村：匿名審査みたいなことですね。

菊地：Hagiyaさんは今回3年生で初めての出場でしたが、模擬裁判大会でベストムーター(最優秀弁論賞)に選ばれました。

中村：それは素晴らしいですね。

菊地：今回、僕と鈴木さんとHagiyaさんが模擬裁判に、横山さん、榊原さん、Hagiyaさんがロールプレイ大会に出場しましたが、Hagiyaさんはどちらも出て、本当に大変だったと思います。



中村：準備はどのようにされましたか？

鈴木：大会の三か月前ぐらいから準備を始め、問題文が出たら読み合わせをしてチームメンバーで事実概要の認識をすり合わせながらメモリアル（申立書）を作って、最後に答弁の練習ってような流れになってきます。

中村：想定問答集みたいなのを作ったりするんですか。それで、だいたい想定どおりになるのですか。

菊地：裁判官の方によっても質問の仕方は全然違いますし、ラウンドごとでも違うので、やっぱり準備はしたつもりだったんですけど、なかなか当日になって、その場で考え、答えなきゃいけないところもあって、難しかったです。

中村：多分見ているほうもわかりますよね。これ準備した問答だったかとか、これはちょっと想定していなかったなって言うものとか。その辺は結構評価の分かれ目になりますね。

鈴木：はい。裁判官の質問にどれだけの確かな答えを返せるかで高いスコアをとれるかどうかが決まります。レスポンスが的確だったので Hagiya さんはベストムーターだったのではないかと思います。

中村：そのためにはしっかりとした準備をしておかないといけないんですね。基本的な知識とかは分かりませんが、受け答えもルーティンみたいなものがあるのですよね、きっと。

藤井：正解があるにはあると思います。例えば、定義について聞かれているときには正確な定義を昔の裁判でこういうことが言われていたというようなことを織り込みながら話ができるかど

うかというところですか。レベルがあがると質問への回答にさらに被せて質問が来たりしますので、どれだけ1つの事柄に深く潜り込んで考えてきたのか、というところが大きな分かれ目になります。何ページぐらいの想定問答を作りましたか？

菊地：僕が話す時間がだいたい17分ぐらいだったんですけど、自分の話す原稿とは別に10ページ分ぐらい質問されたときの答えを用意していました。

鈴木：私も17分話す予定で、ページ数で17ページぐらい、30個ぐらいの質問を想定していました。

Hagiya：私も17分話す予定で、原稿と質問の準備をしました。

横山：僕はロールプレイなので、裁判官からの質問であれば、準備できることもあります。完全アドリブな部分があるので、そこは難しかったです。原稿を作らないにしても事前に配られている情報の中からこういう議論ってできるよねっていうのを考えて、ディスカッションペーパーみたいなのを作っておいて、それに基づいて議論をしたので、ちょっと性質は違うんですけども、やっぱり事前の準備が一番大事ということは痛感しました。

中村：センスが求められるというか、難しいですね。

藤井：与えられた役割をしっかりと果たすことができるかどうかというのが、模擬裁判にしてもロールプレイにしても大事になってきます。裁判だったら例え悪いことをしていた人であろうと、弁護側だったら、その人の権利を守るため

の主張をしないとイケないですし、検察側だったら犯罪が行われたということなので、もう必ず立証してやる、というぐらいの意気込みで話さないとイケない。ロールプレイだと、役割が更に複雑になってくるので、結構大変なところがあるんですけども、いずれにせよ、自分たちに与えられた役割を理解することが大事ですね。

横山：菊地さんから紹介があった、人道支援団体の職員をまさに演じるんですけども、ICRCのミッションの1つに戦争捕虜の抑留施設に行き、例えばその人たちの権利が保証されているか調査するミッションがあります。ロールプレイもそれと全く同じようなシチュエーションでICRCの職員になりきって、勾留施設に行きインタビューをしました。インタビューの対象者が、目に見える怪我をしていたりとかするので「どうして怪我をされたんですか?」とか、そういったことを聞きます。ただ、その聞き方もあくまでも戦争の被害にあっている人なので、言葉使いであったりとか、僕たちの態度とか、そういったところを、しっかり寄り添っている姿を見せました。

中村：けがをしている役の人がいるのですか?

横山：そうですね。皆さんものすごく役に入っているんで、もうリアリティがすごいですよね。最初は緊張するんですが、助けてっていう感じでくるので、そこで冷静になって、でも心は寄り添ってというところなんです。そういった態度が、良かったよって、後々審査をしている方に言っていたので、練習の成果が出せたかなと思いました。

中村：それはどういった場所でどんなふうに行うのですか?

横山：例えば、教室の中に仕切りをたくさん作って模擬の勾留施設や会議室を作って、そこに別室にいた僕たちが入ってきてミッションを開始します。チームの待機室が別で設けられていて、ガイドの方が「お時間になりました。順番です。」と呼びにいらっしゃるんです。それで「それでは、これからこういうミッションに取り組んでください。始めてください」という形で始まるので、本当に会場の様子自体、知らない中で始まります。

中村：設定もその時に聞くんですか?

横山：そうですね。最初に今から訪れるのは捕虜のセンターですと聞くことはできます。ただ、ICRCのミッションを確認すれば、なんとなく事前に想定できることもあるので、練習の段階で捕虜に会った時はこういう質問をする、こういう態度をするっていうのは練習します。

中村：部屋には審査する人はいるのですか?

横山：何人かいらっしゃいます。

藤井：ロールプレイでは、そもそも緊急下でのミッションなので、学生にストレスを与えようとする役割の人たちもいらっしゃいます。例えば素直に部屋の中に入れてもいいんですけども、前回ですと軍人の役の方がいらっしゃって、簡単に施設を見せることはできないっていうような話をされ、そのときに、自分たちは人道支援団体ですという説明がしっかりできるかどうかというところから始まります。我慢強く交渉する姿勢も大事です。

中村：演技力というかその場面をきちんと把握して、パフォーマンスをしないとですね。まさにロールプレイですね。

横山：まさにそうなんです。その中で、例えば法律の知識とかを説明時に入れ込んで行かないと説得的ではなく、点数にもならないです。寄り添うだけではダメで、(法的評価につながる)言葉を取捨選択することが難しかったりします。



藤井：人道支援というと、みんなが受け入れるようなイメージもあるのですが、現実はそのようになって、人道支援してほしい人たちがたくさんいらっしゃる。交渉時には、自分たちがいかに正当性のある存在かということをアピールしなくてはけません。そこで先ほど横山さんがおっしゃったように、法律の知識に基づいて、自分たちはこういう存在なんだ、これをしなければいけないんだということを言うと、向こう側もまあそういう決まりごとがあるならって納得してもらえることもある。被害者が可愛そうだから助けたいんだって、ただただ言っても、立場によっては被害者の捉え方も違って、必要ないからと言われて終わってしまう。いかに自分たちの活動の根拠をしっかりと述べていくのが大事です。

中村：現場もロールプレイみたいな状況なわけで、良いトレーニングですね。

藤井：問題を作っていらっしゃる方々が、現場を経験されていらっしゃるの、また世界中で

似たような大会が行われています。さらに、派遣前のトレーニングで組織として取り組まれていらっしゃるの経験もあり、実践的です。

中村：ロールプレイはグループですのですか？それとも一人一人で？

Hagiya：ロールプレイはグループで活動し、チーム内で役割を決めインタビュー等に取り組みます。

中村：それでは、3人グループならその3人の呼吸が合わないといけないんですね。1人が話してもよくないし。

横山：はい。チームビルディングも大事で、ディスカッションするという状況があれば、1人が話すのではなく、誰かが喋っているところに付け加えて、情報を足していっていうところで「あ、みんなが情報を共有してみんなが理解しているんだな」ということを示さなければいけません。また、捕虜や難民の方でも女性と男性に分けられており、その際は、当然性的搾取等の問題もあるので、男性が女性のインタビューをするっていうのはあまり良くない。男性と女性の捕虜がいるとグループが認識した時点で男性のメンバーが男性に行き、女性のメンバーが女性に行くっていうところも見られています。その辺も含めて事前のチームビルディングやチームワークですね。

中村：それでは、必ずチームの中には男性と女性がいるのですか。

横山：そうですね。できればそれがベストだと思います。

藤井：おそらく聞き方なんだと思います。異性

同士でも、「ちょっとプライベートな質問してもいいですか？」ってちゃんと丁寧にコミュニケーションできれば問題はないかなと思います。基本的には多様性のあるチーム構成であれば、色々な状況に対処しやすいと思っています。

横山：実際に審査員からフィードバックを頂いた時に、「あなたたちはチームワークがすごかったよ」と最初に言っていただきました。

中村：練習すればいいという感じでもないのかな。うまくできるメンバーと、なかなか一人一人の能力があってもうまく合わないということもありそうですし。

横山：当然それぞれに得意不得意があって、でも、夏休みぐらいから練習を始めているので、英語力やその場のレスポンスの速さとかも含めて3人が3人の特性を分かった上で話し合っただけで、カバーし合う練習もしてきました。その場その場でのチームワークが試されるんですけども、練習でカバーできる部分は、大きいのかなと思います。

榊原：8月後半あたりからは3人でファクトシートという模擬裁判で使う設定はどういうものなのかという情報が事前に配られていたので、その情報からロールプレイだったらこういうディスカッションやこういう場面が想定されるっていうのを予めリストアップしました。練習は本番直前まで週に3回くらいのペースで取り組みました。

中村：模擬裁判とそのロールプレイは共通の設定ということになっているのですか？

鈴木：はい。

中村：ということは、同じメンバーが両方やってもいいんですね。

藤井：とにかく暗記が多いので、例えば人道支援も原則とか理念があり、一通り頭に叩き込んで説明できなければならない。そういった覚える作業も多くなる大会で、1人が全部というのは難しいです。が、逆に言えば、覚えることを頑張れば、あまり英語力にとらわれずに皆が参加できる大会です。

中村：いろいろなトレーニングに応用できますね。大会ではやはり緊張しますか？

菊地：すごくします。僕は去年も模擬裁判に出て、今年は二回目でしたが、やっぱり裁判官の方の雰囲気もありますし、準備してきたことが当日出せるかどうか、本当にわからなかったので、すごく緊張しました。

中村：裁判官の方は並んでいるのですか。

菊地：各回に3人裁判官の方がいらっしゃって、その前で弁論をして、ところどころ裁判官の方が気になった質問をされて、その場で返してという流れです。僕が去年出たときはコロナだったので、オンラインでした。今年も一回戦はオンラインだったんですけど、決勝ラウンドの方に残ると対面だったので、初めて対面で経験できました。決勝の舞台は、左側弁護側、右が検察側で真ん中が弁論者です。その前に机が三つ並んでいて、裁判官がいらっしゃいます。

また、今年で宇都宮大学が模擬裁判に出場するのは、4回目でしたが、まだ1度も4校選ばれる決勝ラウンドに残っていませんでした。でも、今年初めて残ることができ、決勝は弁護側が登壇したので検察の僕は出なかったのですが、決勝の舞台のメンバーは、本当にかっこよかったです。

中村：なるほど。チームの中でも役割でこっちは参加する、しないがあるのですね。

菊地：そうです。予選の順位が高いと検察か、弁護かを選ぶことができます。東京大学が1位で決勝進出を決めて検察を選んだので、2位の宇都宮大学は弁護側で決勝を戦いました。

中村：シチュエーションによって、今回は弁護側が有利だろうか、検察が有利だろうかというのがあるのですか？

菊地：宇都宮大学は予選二位で通過でき、宇都宮大学も決勝ラウンドの一回戦は検察側を選びました。

藤井：そもそも弁護と検察とで役割が結構違っていて、検察側は罪を立証することが、弁護側はその立証していることを削っていくっていうんですかね、立証できていないよってアピールすることが大事になってきます。アプローチの仕方で、好き嫌いや好みはあるのかなと思います。

鈴木：準決勝で検察の二人が勝ち進んでくれなかったら、弁護の私の出番はなかったの、本当によかったです。



中村：出番がない可能性もあるんですね。聞いてるだけでこっちは緊張しちゃいますね。私は緊張するタイプなので。ディベートとはまた違うのかもしれないですね。いろいろ調べて、自分の主張をして、相手の主張を聞いて、それに合わせて対応するというのはすごく大事なことだと思います。もっと一般的に学部の教育の中とかにも反映させられたらいいですよ。裁判の文脈ではなくても、いろんなところにきっと使えるのかな。

それでは、皆さんの今後のキャリアプランについて後輩に向けて是非お聞かせください。

横山：就職内定をいただいているので、来年からはそちらで働きますが、国際協力とあまり関係ありません。ですが、ゆくゆくは国際協力の現場で働きたいと思っています。修士論文のテーマでもある、アフリカを舞台に、活躍できる人材になればと考えています。

中村：今はいったん決まったところで仕事をされてということですかね。

横山：はい。僕の場合は、英語のスコアを高めて、色々な経験も積んで、国際社会で戦える人材になれるようにこれからもがんばります。

また、後輩に向けてですと、藤井研究室で勉強していると、国際学部の他の学生さんと違うキャリアプランだったり、違う選択肢を選ぶ機会が多いです。これは、結構勇気があることだと思うんですけども、先輩として偉そうに言うのであれば、臆せずそういう選択肢を選ぶということはすごくいいことだと思います。僕は今、こうやって大学院にいるからこそ、素敵な後輩に出会えたり、素敵な賞をいただくことができたので、その他の学部生の友達と違う選択肢をするということに対し、臆せずチャレンジして欲しいなと思っています。

Hagiya：私は今、国連のインターンに応募させて頂いておまして、それとてもいい機会だと思っておりますので、できれば将来、国際機関などで活躍できたらなと思っております。

鈴木：私は来年の春からメディアの記者職での就職が決まっております。国際機関で働きたいという希望は入学当初からなくて、メディアでという気持ちが強かったので、本当にその夢がかなったのはこういう学外活動の経験の積み重ねが実ってそこにたどり着けた、という思いです。キャリアプランの目標としてはやっぱり紛争現場での取材で番組を作って助けを求めたくても声を上げられない人の声になるっていうその思いでメディアの道も志しましたので、国際学部での学びを今度は自分のメディアでのキャリアに生かして活躍できる人材に、なりたいと思っております。

時間のある学生生活の4年間って、すごく短いようで長かったな、と私は振り返って思うので、できることってたくさんあると思っておりますし、臆せずにいろんなことにチャレンジしていったら繋がっていないように思える道でも最後は繋がっていたんだなって思えるんじゃないかな。私はメディアで就活をするときに周りの学生は彼らのゼミがメディアの人たちと繋がっていたりとか、OB・OGの方の知り合いがたくさんいらっしゃるみたいなそういう状況の中で藤井先生にも、もう自分の4年間やってきたこと、ちょっと間違っていたんじゃないかなと、相談することもありました。でも、結果的に希望する職種に就けて、自分が進んできた道はやっぱり間違いではなかった、ちゃんと繋がってんだなあと思えたので、やりたいことを突き詰めるってことを怖がらないでやっていけたら、将来の自分のやりたいことに結びついていくんじゃないかなと思っております。

中村：ありがとうございます。4年間あっという間だったっていう人は割と多いと思うんですけど、終わったら長かったというのはよっぽど色々取り組まれたのかと思いました。

菊地：僕は今、大学4年生で、インターンシップをセーブザチルドレンジャパンという子どもを支援するNGOでさせて頂いて、将来的にもそういったNGOだとか、それこそ国際機関だとかで人道支援に携わりたいと考えています。今後の進路としても、まずは宇都宮大学に推薦で院へ進学させていただくことになりました。しっかり勉強してもし可能であれば海外の院の進学だとかも目指していけたらなというふうに考えています。

中村：こちらに進学してくださってありがとうございます。ぜひ生かしてさらにステップアップしてってください。

榊原：私は研究職を目指しております、来年からオランダの院の方に進学したいと考えています。今、応募書類を書いている途中ですが、オランダは国際法の分野でも、平和の分野でも研究が盛んな大学が多いので、そういう場で今回のロールプレイで学んだことやこれまで宇大で学んできたことを専門的に、もっとそれに興味がある人たちと共に学んでいけたらと思っています。

中村：院の途中でできればということですね。オランダですと藤井先生がご存じだと思いますので、ご助言いただけるということですかね。

藤井：そうですね。オランダは留学にとっても良い環境が整っています。また、宇大の大学院に在籍し、休学して渡航されるので、もし、また世界的な何かがあって緊急帰国しなければいけ

ないケースでも戻る場所があるので、安心して送り出せます。

中村：よく考えたら私もそうでした。修士の途中で出て帰ってきてまた修士をとったので、それはそれでありですね。そろそろ長くなるといけけないので、これで終わりにしようと思いますけど、藤井先生のご指導はどうですか？ちょっと言いにくいかもしれないですけど。

横山：僕はこの中でも一番長く、本当にお世話になっているので、もうとにかく感謝しかありませんし、さっき藤井研究室にいるといっぱい選択肢があってという話をしたんですけども、そういった選択肢を出してくださるのも藤井先生なので、すごくすごく感謝をしています。アフリカっていう地域に出会ったのは、藤井先生との授業を通して、藤井先生とお話を通してなので、すごく先生とお話させていただいて、世界が広がったなって言う思いがすごく強くあります。

鈴木：私は国際化と人権っていう授業を一年生の前期に履修したんですけど、その時から藤井先生のゼミに入るにはどうしたらいいですかっていうお話をさせて頂いて、先輩にもついて回って4年間やってきました。大学に入った時はもうとにかく海外にいっぱい行っているんなことやってみようっていう気持ちだったんですけど、藤井先生に出会ってからその考えが180°変わって、まずは求められることにしっかり応えられる人間になれるように知識も経験重ねてから色々な事に、それからチャレンジしていこうと思ったので、学部時に特段こう留学をしたいとかそういうことじゃなくて、まずはしっかり自分のスキルを高めていくってところで、最後繰り返しになってしまうんですけど、うん。メディアの道が開いたと思っています。

す。この研究室と藤井先生に出会えなかったらうん、叶わなかったものだと思いますし、感謝しきれない恩師です。

菊地：僕も本当に元々高校から大学に入学した時は、なんか国際協力やりたいな、くらいの気持ちでした。国際化と人権を一年生の最初の授業で履修しまして、人権という専門分野を、高校のときは知らず、こんな面白い分野があるんだっていう、そこで初めて知りました。そこからゼミにも入り、もともと正直、勉強はあんまり好きではなかったんですけど、授業以外の事にも参加したいと思えるぐらい、本当にすごい色々なこと教えてくださって、毎日楽しく勉強させていただいて感謝しています。

榎原：研究職を目指せるようになったのも、藤井先生があってこそです。大学に入った頃には研究職は考えていなくて、メディアを目指していました。学会に3年生の時に参加し、その学会で扱ったテーマが自分の研究したいテーマとなり、さらに自分がメディアに入ってしまったことも合わせて、研究のテーマにしたいと考えています。自分の進路ややりたいことを固めていく上で、藤井先生のアドバイスがあったおかげでここまでやってこれたと思うので、本当に感謝しています。

Hagiya：私はもともと国際機関と国際協力に興味があったんですけども、その分野に関わるにはどうすればいいかわからなくて、やっぱり藤井先生と出会っていろいろな機会を与えてくださって、本当にこの道がちょっと見えたような気がするので、とても感謝しております。

中村：最後に藤井先生から今回のことを総括していただければと思います。

藤井：学部の4年生二人も大学院修士の二人もほとんど海外経験がなくて、留学にも行ったことがないです。特にコロナ等もあって行けなかったというのも勿論ありますが、様々な事情で行けない学生も国際学部には沢山いらっしゃる中で、英語の大会で2位を獲得されて、本当に、大きな希望になってくれたのかなと思います。留学に行ったから、語学が上手になるっていうわけでは決してなくて、国内でも目的を持ち取り組めば、彼らのように英語で交渉をしっかりと、しかも素晴らしい大学が集まっている大会で結果を残すことができる。厳しい指導もしましたので、正直ほっとしましたが、本当に普段からの彼ら自身の努力がしっかり反映されたからだと思います。なかなかこう結果が出る、出ないで言えば、結果が出ないことの方が多き世界です。参加することに意義があるってよく言われますが結果を残していかないと特に宇都宮のような地方の国立大学ではその後のキャリアにつながることは難しい。今回の経験で、自身の世界がまた少し変わった方がたくさ

んいらっしゃると思いますので、ぜひ次のステージでも輝いてほしいと思います。これからの飛躍に期待しています。

中村：ありがとうございました。国際学部の学生の皆さん、すごく潜在的な力があると思うので、こうやって藤井先生のようにそれを引き延ばしてくださる先生方とうまく噛み合うと、このように世界レベルでの活躍に結びつく機会もあると思いますし、自信を持ってこれからも取り組んでください。ぜひ後輩たちにも引き続き色々アドバイスをお願いできればと思います。

